

だからベートーヴェンは難しい

古澤 巖
(ヴァイオリニスト)

クラシック、ポップス、アイリッシュ・フュードルなど、様々なジャンルの奏法を研究してきた古澤巖。

いまや日本を代表するヴァイオリニストだが、実はベートーヴェンが苦手だという。なぜ苦手なのか？ ベートーヴェンを弾きこなすために何が足りないのか？ その果てしなき道程を語る。



実は僕が最初にレコーディングしたのは、ベートーヴェンのヴァイオリン・コンチェルトでした。

芥川也寸志さん指揮で、彼が東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の芸術顧問が来たので、なんて言い訳しようかなあ、と思つていたんです(笑)。

そもそもベートーヴェンには、ピアニストなら『エリーゼのために』のような「ちょっとした甘い瞬間』を表現した、心が安らぐような曲があるけれど、僕らヴァイオリニストたるもので、それをオーケストラと弾いたことがあるかな、という程度で。そういう甘くて優しいイメージの曲を演奏する機会は、ほとんどありませんでした。

そんなこともあって、僕にとつてのベートーヴェンは、クラシック音楽そのものというか、常に立ちはだかる壁のような存在でした。

いきなり変な話ですが、実は僕、自分で物事の善し悪しの判断があまりつかないんです。たとえば、女性に「私のこと好きなの？」って聞かれても、よくわからない(笑)。確かにその人のことを好きだけど、本当のところ何がどこまで好きなのか、自分の中でよくわからない。有名な寿司店の「すきやばし次郎」に初めて連れて行つてもらつたときも、僕は普段、あんまり

た。

ベートーヴェンは、クラシック界を代表する存在です。有名な作曲家にはバッハもいるし、モーツァルトもいるけど、何はなくともベー

トーヴェン、という感じですよね。でも、僕はずっと彼を苦手にしてきたんです。

僕は、ジョヴァンニ・ソツリマという、とても変わったチエリストにずっと憧れているのですが、最近、彼がある雑誌で「私がもつとも尊敬するのはベートーヴェンだ」と言っているのを読んで、「これはまずいな」と思った。今年はベートーヴェン生誕二五〇周年だというし、

りお寿司を食べないこともあって、最初は何がどういのかわからなかつた。回数を重ねるにつれ、じわじわとよさを感じました。湯河原に「らあ麺 飯田商店」というラーメン店があるんですが、ここも有名な店で「ラーメン大賞」を三連覇してますよ。その飯田商店のラーメンを初めて食べたときも、やはりピンとこなかつた。今では週四回通つていますけれどね。食べ続けているうちに、「なるほどみんなが『本物』というものは、やっぱりそうなんだな」と思うようになつてきた。僕にとってのベートーヴェンも、おそらくその類のものだらうと。

能楽とのコラボといえば、僕としてはベートーヴェンの四重奏の、あの止まつたような曲調しか思いつかなかつた。そこで、数あるカルテットの中から、とにかく「重たいもの」ばかりを集め、それを延々と、お能と一緒に演奏するという、本当に変わつた会をやつてみたんです。そうしたら、自分が弾いているとき、何かが自分にのしかかってくるような感覚があつて。

もちろん僕には、靈感などはまったくありません。それなのに演奏しながら、なぜだかわからないけど、ベートーヴェンの「人となり」を今までいちばん感じました。「これが、彼が曲を作つたときに感じていたことだつたのか」とわかつたような気がした。

たとえばモーツァルトなら、その人柄を伝え面白いエピソードが盛りだくさんですよね。ベートーヴェンだって本当は、明るくて面白い

能楽堂で感じた靈感